政務活動調査報告書　　平成 28 年 11 月 14 日（月）～15 日（火）

（視察者：畔柳敏彦・井手瀬絹子・畑尻宣長・野島さつき）

視察内容と結果について・・東京都立川市「ふじようちえん」の取組について

立川市「ふじようちえん」の取組みについて　　11/15

立川市＝面積：24.36ｋ㎡　　人口：175,388 人　人口密度：7,216.42 人/ｋ㎡
世帯：84,841 世帯　経常収支比率：92.8 ％　　実質公債費率：2.5 ％

＜概要＞

教育方針

●みんなちがってみんないい
●わたしひとりでできるように手伝って
●理解は驚きに始まる
　自分で感じて、気づいて行動に結び付けられること。
　だから、人も、園舎も、馬も、木も、草も、子どもが育つための道具なのです。

園児数　：650 名　　クラス数：19 クラス
敷地面積 4,791、69 ㎡　　建築面積 1,419．25 ㎡

＜モンテッソーリ教育法の実践＞

イタリア初の女性医学博士であったマリア・モンテッソーリ女史が、精神科医として、子どもにかかわっている時に、手を動かすものを渇望していることを見てとりました。種々の教具を考案し、1907 年ローマに子どもの家を開設し、その後ヨーロッパ各地、インド、アメリカ、日本においても導入されています。

モンテッソーリ教育の基本は、「子どもは、自らを成長発達させる力をもって生まれてくる。大人（親や教師）は、その要求を汲み取り、自由を保障し、子どもたちの自発的な活動を援助する存在に徹しなければならない」と言う考え方にあります。つまり"自分での気づき"を大切にし、自立心が育つことを主眼としています。 "Help me, Do it myself."「私が自分でできるように･･･手伝って!!」その子らしさを大切にするお手伝い･･･の気持ちを常に意識して、子ども達との距離を保っています。

＜施設＞

　緑に恵まれた広い園庭を中心に全ての保育室が園庭に面した楕円形・平屋建ての園舎であります。屋上も広いウッドデッキで遊びのスペースが確保されています。ウッドデッキが心地よい南園舎。園庭南東の林の中にコテージ風の保育室が一棟。給食設備（スマイルシェフ…キッチンカフェ・ランチルーム）となっています。

　また、ローラーすべり台・つき山・鉄棒・砂場・花壇・波のりすべり台・子ども農園畑・けやき・日時計・郵便ポスト・大木・ツリーハウス・エアーランド・パソコン動物たち（ポニー・アヒル・うさぎ・陸ガメ）

※全室冷暖房（床暖房・オンドル式）がついています。

※全室、室内は全て無垢木材フローリング

施設の受賞歴

2013 年

・日本建築学会作品選奨
（ツリーハウス　Ring Around a Tree）

2011 年

・文部科学大臣表彰受賞
・学校施設好事例集(第 4 版)最優秀賞、OECD/CELE
・日本構造デザイン賞　作品賞
（ツリーハウス　Ring Around a Tree）

2009 年

・日本建築家協会賞
・The Architecture Award, Asia Pacific Property Awards

2008 年

・日本建築学会賞（作品賞）

2007 年

・経済産業大臣賞 キッズデザイン賞金賞
感性創造デザイン賞
・経済産業大臣賞 グッドデザイン賞
インタラクションデザイン賞

・アジアデザイン大賞
・こども環境学会賞　こども環境デザイン賞

Forbes japan に「理念をデザイン化する、世界一楽しい幼稚園」として紹介される

＜給食について＞

昼食は、幼稚園で作る「ランチ」と、お母さんの作る「お弁当」と、どちらか選ぶことができ、行事や園外保育の時は、お弁当となります。（お弁当の日は、毎月 1～3 回）

給食は、素材や器、水などにこだわり、安全でおいしい、できたてのランチを提供しています。2001 年 10 月よりスタートした給食設備（スマイル　シェフ）の中には、キッチンとランチルーム、そして父母も利用出来るカフェもあります。

各クラス順番に（月 :1～2 回）　ランチルームで昼食をとります。そのクラスの家族にも、子どもたちと一緒にランチを食べて、親子コミュニケーションが取れるようになっています。

★ふじようちえんの給食は、委託で「一冨士」という会社が調理をしております。
化学調味料を使わず、塩と醤油にこだわった和食中心のメニューとなっています。
また、万能食である、「玄米・五穀米・十穀米・胚芽米・古代米、等」も取り入れた、体にいい食事を目指しています。
★ふじようちえんでは、牛乳を給食では飲んでいません。
お弁当の子どもたち、アレルギーがある子どもたちも、全員が飲める飲み物として「麦茶」を飲んでいます。モンテッソーリ教育の一環として子どもたちが、ピッチャーでお茶を注ぎ、年長さんはトレイで運ぶということを毎日行っています。
★ふじようちえんには、畑（スマイルファーム）があり、無農薬で様々な野菜や果物を作っています。年間を通じて作物を量産し、給食に「旬の美味しい野菜」を多く取り入れています。
とうもろこし・スイカ・かぶ・ラディッシュ・チンゲンサイ・ほうれんそう・小松菜・玉ねぎ・ねぎ・かぼちゃ・枝豆・落花生・ブルーベリー・柿・みかん・夏みかん・きゅうり・トマト・なす・とうがらし・ピーマン…等々を、作っています。

＜英語教育＞

世界の人たちとコミュニケーションをとれる手段として「英語」を話せることは、とても重要なことであるとの認識で、日本と英語の言語間の距離があり、日常会話を習得するのも困難を要しているのが現状です。小学校から英語教育が導入され始め、英語は今後、さらに重視されてくると考えています。

ふじようちえんには、毎日、ネイティヴな各国の先生が 6～9 名います。
周辺の横田基地から通ってきている、英語が母国語の園児たちが在園していることもあり、いっぱい刺激を受けて、世界を意識した感性を磨いて欲しいという思いで進めてられています。

英語コース（希望者登録制）
「話せるようになってしまうクラス」として、英語カリキュラムを 2010 年より導入しました。
2015 年実績で、504 名（4 才児 151 名・5 才児 115 名・小学生 238 名）が学んでいます。

↑ポーニーが２頭います。

↑園長のデスクはすべての教室が見渡せる場所に設置してあります。

＜所　感＞・・畔柳敏彦

旧「ふじようちえん」は築３６年が経過し老朽化してきた中、２００４年の新潟地震の被害状況を見て「万一子どもたちに何かあったら」と思うところから加藤積一園長は建て替えを決意され自然と一体化した素晴らしい幼稚園を２００７年にリニューアルオープンされた。
この園舎は今まで見たことないデザインがされていた。ドーナッツのように広い園庭をぐるりと囲むように建てられた楕円形につながった園舎、その屋上は円形の大きな運動場として子供の遊び場になっている。園舎自体がワンルームというユニークな形になっています。円形の造りのため、自分がいるところがいつも真ん中に位置する発想であります。屋根は木張りのデッキ、その屋根を欅の大樹が３本突き抜けている。また、雨の日は屋根から雨水が滝のごとく落ちるガーコイル、子どもたちが水を実感し、遊び、学びにつながる場所になっている。
電球は、昭和３０年代を思わせる裸電球、ヒモで点けたり、消したりして、リモコンスイッチではわからない電気の道理を見せたり、居ないときは消すというように便利さよりもその行為をせざるを得ない状況を作り出しているのが特徴である。園庭側、外側の壁は厚さ 8mmのペアガラスでどこからでも子どもたちの活動が見渡せる。教室の間仕切りは木製の箱型

のロッカーを利用したパーテーションで区切られている。加藤園長は壁で仕切りがないことは、調子の悪い子どもが来た時、職員会議をしなくても、情報の共有化を図る意味で大変に効率的であるとの認識である。「園舎が巨大な遊具」というコンセプトでデザインされている。子どもは“遊びが学び”“遊びながら子どもは育つ”と位置付けて幼児期でなければ得られない実感、実体験を大切にしていくことにしたそうだ。「ふじようちえん」の教育の方針はモンテッソーリ教育の実践であるという。子どもが本来持っている”自ら育つ力“を引き出し、洗練させる科学的プログラムであります。①日常生活の練習②感覚教育③
言語教育④算数教育⑤文化教育と領域を 5 つに分けて実践している。モンテッソーリ教育は世界第 1 号の女医であり、教育者そして母であるイタリア人マリア・モンテッソーリが作り上げた教育法であります。五感を洗練される様々な教具と関わりながら 1 人でやりたい・・1 人でできたという達成感と自信を重んじる欧米では広く普及している教育法であります。これは日本の幼稚園でも多くとりいれているものと思われるが、「ふじようちえん」自体がモンテッソーリ教育の環境を包含していることに深い感銘を覚えた。また英語教育も 2 種類準備され英語を楽しむ･好きになるプログラムや英語が話せるようになってしまうプログラム。学童保育、プレスクール、預かり保育など「ふじようちえん」の中で、すべての子育ての体制が網羅されていることは驚きであります。

この幼稚園がすごいのはハードだけではなく親を幼稚園に招いて親子給食会を開いたり、園児の成長の記録をデジカメで先生が撮り、手書きの記事を添えて、「今週の子供ニュース」として各家庭に届けたり、親子のコミュニケーション、幼稚園と家庭のコミュニケーション図ることや自治会祭りへの協力、地域の防犯活動として「あいあいパトロール」の全職員参加など地域貢献での絆を深めていくためのソフト面の活動も充実している。
この幼稚園は「世界で一番楽しい幼稚園」として評判が高く、私どもの調査活動で伺った日の午前中は、九州の幼稚園の関係者 20 人ぐらいの団体と合同での説明会でありましたが、午後からは都内の関係者、約 60 人の団体が訪問されるということで連日の賑わいであります。本市の認定子ども園などの新規建設の際にはすべてとはいえませんが参考にしていただく価値は十分にあります。

＜所　感＞・・井手瀬絹子

日本で一番有名な幼稚園として認知され、連日国内外から多くの視察者が訪れるという「ふじようちえん」、訪問し勉強させていただきました。
19 クラス、幼児数約 650 名、敷地面積 4,791、69 ㎡、建築面積 1,419．25 ㎡、地上 1 階建、「園舎は巨大な遊具、子どもが育つ道具」とのコンセプトを具体化させた園舎、中庭と屋上の回遊性が幼児の体力向上に繋がり、子育て支援の場となるランチルームとカフェを用意するなど地域連携にも考慮しています。教育方針は、「みんなちがってみんないい」「わたしひとりでできるようにてつだって」「理解は驚きに始まる」自分で感じて、気づいて行動に結びつけること。だから、人も、園舎も、馬も、木も、草も、子どもが育つための道具なのです。園児一人一人が自分の脱いだ靴を自分で揃える姿は大変印象的でした。想像を超える斬新なドーナツ型の園舎は、アートディレクターの佐藤可士和氏を中心に、建築家の手塚貴晴

氏・由比氏によって設計され、グッドデザイン賞や、アジアデザイン賞、日本建築家協会賞など数々の賞に輝いています。ドーナツ型で行き止まりがないデッキ「走れる園舎」が大きな特徴でサッカーを取り入れている幼稚園より圧倒的に歩数が多い結果となっています。回遊性の中に自然の樹木を活かした遊具や園庭に通じる滑り台など立体的な遊び環境を作り出しています。木登りのできる欅や広い砂場など様々な要素が準備されています。教室はすべてガラス張りで天窓から光が入る開放的な作り、教室と教室、屋内と庭の境界線がありません。園庭には 2 頭のポニーがいて、園児達は自分達よりも大きい動物と遊びます。園舎の軒先には、自分達で収穫したトウモロコシやミカン、オリーブ、長いも、手作りの干し柿等が並べられ、その横に加藤園長のデスクが外を向いて配置され、いつでも園児を見ています。教職員も歩きながら全体に目を配ることができ、固定の仕切りがあまりないため、仲間はずれができにくい環境になっています。佐藤氏曰く、「教育をデザインしたい」が「状況をデザインする」になり「建物のデザイン」へつながっていって「子供の育ちの中味とそれに貢献できる建物」になったそうで、当にその通りの貢献している園舎であることが一目瞭然、理解できました。それは、加藤園長のポリシーである、「子どもが育つこと」を真ん中に、育つ過程において大事な昔の子供たちのように「五感をフルに使わせること」のための、雨に直接さわれるガーゴイルの設置で、雨の音を感じて情感を育む、また、園庭もわざとガタガタに作って体幹を形成する、集中力を養うために、壁を取り付けず、わざとうるさい状況を作り出す、ドアは全て閉まりにくくして、隙間風を感じて自らきちっと閉める仕掛け、水を出しっぱなしにしないために、跳ね上がった水で脚が濡れるようなデザイン等、その他にも数多く取り入れられています。これは、加藤園長が大切にしている、「子ども時代にやることは、子どもをしっかりやること」の表れで、加藤園長が私達にその一つ一つを丁寧に説明して下さる姿勢に「教育」を見た思いがし、頭が下がりました。ふじようちえんが、世界から最先端と注目されている本当の理由は、時代の頭としての「先端」も意識しているが、きちんと「しっぽ＝五感をフルに使わせること」もとらえ、子どもたちにわかりやすく伝えていることにあるということが、しっかり認識できました。

また、ふじようちえんはモンテッソーリ教育でも有名です。同ようちえんでは、先代から 45 年間この教育を行っています。園長や教職員は、モンテッソーリ教育の基本にある、「子供は自ら成長発達させる力をもって生まれてくる」、子供たちの自立心が育つことを主眼に置き、自然や人とのふれあいの中で、多くの発見をし、自ら考え、理解していくことをサポートすることが最重要としています。

同ようちえんでは、幼児教育は勿論、経営という観点においても非常にバランスがとれています。教職員の自主性を重んじて、様々なイベントを自発的に開催し、利益は全て先生たちで分配していいようにしています。こういう機会を通じて、先生にも「利益が生まれる瞬間」を感じ、経費感覚を養えるようにしています。加藤園長は、子供よし、家庭よし、先生よし、の「三方よし」が派生して、それが、地域へと広がり、「幸せな未来をつくること」のデザイン化を推し進めています。理念をデザイン化する、世界一楽しい幼稚園「ふじようちえん」は、私が今まで見たことのない、出会ったことのない幼稚園でした。岡崎に戻り、2 週間余、加藤園長から、1 通の葉書が届きました。そこには、その後の園児たちの元気な

様子を撮った写真とお礼の言葉が自筆で認められていました。私達が視察をさせていただいた日は、九州の幼児教育関係者 20 数名も同席されていました。恐らく毎日のように視察者を受け入れておられると思います。その超多忙な園長先生が一人一人にお礼状を、だからこそ、こんなに素晴らしいふじようちえんが存在し、運営されているのだと、園長先生の人間的魅力に圧倒されました。本市の幼児教育に一つでも活かしてまいりたいと思います。

＜所　感＞・・畑尻宣長

世界一楽しい幼稚園として、雑誌 Forbes japan に取り上げられた「ふじようちえん」に行き学ばせて頂きました。基本理念として、モンテッソーリ教育を取り入れています。ようちえんに入る入り口には、「見て、ふれて、感じて考えて、行動する。この繰り返しで子どもは育つ」と大きく書いてありました。加藤園長は、不便さについて話を伺いました。あえて、不便さを感じてもらうということを体験させているということでした。一つの事例で、今の子供たちは、電気をつけるのに、リモコンを探すそうです。しかし、このようちえんでは、全部ではありませんが、教室の数カ所に、昔はそうであった“紐”でつける、消すことが出来る電球を用意してあります。また、外の水道に、シンクを用意されていません。それは、地面に跳ねた水を感じることで、水の出る量を、自ら感じて調整する力をつけるためだそうです。そういったことを、園長は「育ち」ということで、自然の中で身に着く力を育んでいました。まだまだあります。このようちえんは、様々な建築的要素、デザイン要素で表彰を受けています。しかし、遊具は滑り台くらいしかありません。その意図は、遊びも成長の素との考えで、遊びを作り出していくことを期待して置いてないそうです。

このようちえんは、本来、持ち合わせている子どもたちの能力を最大限に発揮するように仕向けられていると感じました。冒頭にありました、ふれる、に関しては、私たちが話を聞いている間にも、近くに寄ってきた子どもたちが、園長先生に、ハイタッチするなど、その場のつくられたものでなく、常日頃からのコミュニケーションの表れだと感じました。今の子どもたちに必要な環境だと強く思いました。本市の保育園でも取り入れることは出来るのだろうか。考えました。ハード面は難しい面があると思いますが、ソフト面である、ふれあいや、あそびを「育ち」の糧にすることは出来るのではないか、そう感じました。

また、近くに敷地を借りて「スマイルファーム」で野菜など栽培もしています。視察に訪れた前日には、稲を脱穀したそうです。それも昔、私の実家にもあった木製の脱穀機で行った写真を見せて頂きました。少し懐かしい気分になりましたが、こんな体験が出来る子どもたちは幸せだと思いました。どうやってお米が出来るのか、体験できることの重要性も感じました。そういった、感じる、教育を実践しているふじようちえんは、全国のようちえんか

らの視察も受け入れています。出来ることから、本市でも取り組んでいけるよう提案していきたいと考えています。

＜所　感＞・・野島さつき

マスコミにも取り上げられている『世界一楽しい幼稚園「ふじようちえん」』とは、どのような幼稚園だろう。

まず驚いたのは、特徴的な園舎です。「屋根で遊べる幼稚園」というキーワードの下設計されたドーナツ型の園舎で、子供の特性(丸い場所だとひたすら走り回る)を活かした造りになっています。行き止まりがないことで、子供の体力向上に自然な形で取り組めるよう工夫されており、円形ということで、先生方の目が行き届きやすく、仲間はずれができにくい環境となっているそうです。また、子育てを支援する場となるランチルームやカフェも用意されており、保護者同士が子育ての悩みを相談したり、地域の子育てネットワークづくりを行う場としても活用されております。

もう一つの特徴が、「モンテッソーリ教育」を取り入れているということです。《自分での気づき》を大切にし、自立心が育つことを主眼としています。子供がこれをしたい！これに挑戦したい！ということを自ら決めさせ、大人はそれをあくまでもサポートすることにより、受け身ではなく自ら意思を持って色々なことが決められる子が育つ、子供が本来生まれ持っている「自ら成長する力」を見守り、信頼する教育がなされているとのことです。

最先端の幼稚園のようでありますが、昔ながらの日本の文化をきちんと伝える、例えば野菜作りや米作り、脱穀体験やポニーの世話をしたり、自然の中で四季折々の感覚を味わい、五感をフルに使って、感じて考えることも大切にしています。

また、集中力を養うために壁を取り付けず、わざとうるさい状況をつくりだしたり、水を出しっぱなしにしないために、跳ね上がった水で脚が濡れるようなデザインも採用されています。

建物を真似することはできませんが、取り組みとして参考になることが沢山ありました。保育園(幼稚園)は、子供が初めて親から離れて社会生活を営む大切な場所です。特に幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要な時期であります。人やものとの関わりの中で自我や主体性が芽生え、具体的な体験を通して豊かな感性や好奇心、探求心が培われていきます。次代を担う子供たちが心豊かに逞しく生きる力を身につけられるよう、大人が手を出しすぎず、信じて見守る教育の必要性を感じました。

結びに、ふじようちえん、加藤園長の教育モットーは、「子どもを育てる近道は、大人が成長すること」。この言葉は、子育てに携わる者として、常に心に留めておきたい大切なことだと、改めて思いました。

以上